



世界水準の山岳リゾート HAKUBA の学びの循環サイクルの構築

目指す学校像

地域と協働した学びにより白馬で成長した生徒が、この地域を支え、あるいは世界を舞台に活躍し、その姿を見た生徒がまた白馬に集う。そのような好循環を永続的に生み出せる学校。

山岳リゾート白馬・小谷地域

【育てたい生徒像①】  
地域課題に当事者意識を  
持って解決できる生徒

白馬高校

白馬 SDGs ラボ

～地域の人々と学び、実践する場～  
【実践力・チームワーク】  
白馬で SDGs 達成のために、  
「小学生、中学生、高校生、大人が  
協働して、やりたいことをやる。」

観光を材料とした英語学習

PBL

3年 白馬の未来を  
デザインする  
【倫理観・多様性・協働性】

白馬の理想の  
未来を創る

教科学習  
チームビルディング

【育てたい生徒像②】  
学校を飛び出し  
地域で実践したい生徒

2年 地域課題の  
解決策を提言する  
【創造力・論理的思考力】

白馬の課題の解決策  
を提言する

教科学習  
チームビルディング

白馬コンソーシアム

- <学びのサポーター>  
松本大学  
信州大学
- <地域のサポーター>  
白馬村・小谷村  
白馬観光開発株式会社  
八方尾根開発株式会社  
しろうま荘  
シェラリゾート白馬  
白馬東急ホテル
- <グローバル教育>  
白馬インターナショナルスクール  
設立準備財団
- <管理機関>  
長野県教育委員会

1年 地域を知り、発信する  
【情報収集・分析力】

白馬の魅力を  
他者に伝える

教科学習  
チームビルディング

ふりがな	ながのけんきょういくいんかい	ふりがな	はくばこうとうがっこう
管理機関名	長野県教育委員会	学校名	白馬高等学校

## 2019年度 地域との協働による高等学校教育改革推進事業 実施体制の概要

### 1 管理機関・学校の概要

#### (1) 管理機関名, 代表者名

管理機関名：長野県教育委員会

代表者名：原山 隆一

#### (2) 学校名, 校長名, 研究を実施する学科

学校名：白馬高等学校

学科：普通科 専門学科 総合学科

校長名：臼井 彰一

### 2 取組内容

#### (1) PBLの実践を通じたカリキュラムとアセスメントの開発

既存のカリキュラムを体系化し、地域課題を解決するための教科横断型のPBLができるよう、各学年の段階で、「チームビルディング→教科学習→PBL」というサイクルを構築する。地域課題を解決するためのPBLを行うために、チームビルディングでは、チームで目標を達成するための動機付けを行い、活動に対する当事者意識を高める。教科学習では、地域課題に関連する事例を扱ったり、情報収集・分析方法、文献の読解、リフレクションなど、PBLに必要な基礎的な力を身につける。

#### (2) 地域をフィールドにした学習活動を推進するための「白馬SDGsラボ」の設置

白馬の山岳環境や生物多様性の中で、人々が将来にわたって豊かに暮らし続けるためにできることを行う。生徒が地域の人とともに学び、実践することで、社会問題に関心を持ち、チームで実践する力を身につける。「白馬SDGsラボ」を創設し、SDGsの視点で地域課題を発見し、生徒と地域の人たちが楽しくできる解決策を考え、実践する。

#### (3) 地域と連携した授業を推進するためのコンソーシアムの設置

地域と協働した授業やPBLをより推進するために、「白馬コンソーシアム」を設置する。生徒が地域の人との関わりや地域での活動を通して、白馬・小谷地域に対する愛着を高める。そして、将来この地域で新しい価値を創造できるような活動に寄与できる人材を育成する。

### 3 管理・運営方法

#### (1) 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
松本大学総合経営学部	教授 白戸 洋
信州大学キャリア教育サポートセンター	センター長 平野 吉直
白馬村	村長 下川 正剛
小谷村	村長 中村 義明
白馬観光開発株式会社	代表取締役社長 和田 寛
八方尾根開発株式会社	代表取締役 倉田 保緒
しろうま荘	支配人 丸山 俊郎
シェラリゾート白馬	代表取締役 金澤 邦隆
白馬東急ホテル	総支配人 吉野 良平
白馬インターナショナルスクール準備財団	代表理事 草本 朋子
長野県教育委員会	教育長 原山 隆一

## (2) 将来の地域ビジョン・求める人材像等の共有方法

白馬というフィールドを生徒の学習の場として、地域の人と関わりながら、生徒が主体的に学びたいカリキュラムの開発と実践を行う。また、地域との協働による学びを通して成長した生徒が、今後もさらに継続して地域を支え続けたり、世界を舞台に活躍する卒業生の姿を見た人々が白馬に興味関心を持って集う。このような循環を永続的に生み出せる生徒の育成を目的とする。

## (3) コンソーシアムによる研究開発体制

- ・年度初めにコンソーシアムを企画し、専門家や各種団体の助言を得ながら、カリキュラムの研究と開発を行う。併せて地域で求められる人物像を特定し、その人物像に至る具体的な筋道を研究する。
- ・コンソーシアムの各団体と学校を結び付け、担当教員と学習プログラムを構築し、情報の共有を行う。
- ・年2回コンソーシアム代表者会を開催し、白馬 SDGs ラボや高校での授業内容、育てたい生徒像の情報共有を行い、研究内容をさらに深める。

## (4) カリキュラム開発等専門家の指定及び配置計画

柳田 優（白馬村在住，元教員）

コンソーシアムの各団体と学校の教育活動を結び付け協働して学習プログラムを構築する。

## (5) 地域協働学習実施支援員の指定及び配置計画

丸山俊郎（白馬村内の旅館「しろうま荘」支配人）

様々な地域でのイベントの企画運営に関わる。

## (6) 運営指導委員会の体制

県教育委員会所管課（学びの改革支援課）に地域協働指定校を担当する指導主事を置き、指定校の取組に係る手続等を一括管理する。事業全般に係る恒常的な指導・助言を行う。

団体	役職	氏名
松本大学	総合経営学部 観光ホスピタリティ学科教授	白戸 洋
白馬ロータリークラブ オーブス株式会社	会長 代表取締役	岸 清美
白馬山麓事務組合	総括兼支援局長	平塚 茂雄
白馬村議会	議員	伊藤 まゆみ
長野県教育委員会事務局 学びの改革支援課	課長	佐倉 俊

## (7) 研究成果報告・事業成果の検証に向けた計画

### (ア) PBL の実践を通じたカリキュラム、アセスメントの開発についての検証

生徒に対して、質問紙によるアンケート調査（全数調査）やインタビュー調査（標本調査）を行う。この中で、3年間の経年変化、学科間・コース間での実施内容等のリフレクションを行う。教科横断的な学習とPBLがどのように生徒に影響を与えたかを検証する。

### (イ) 「白馬 SDGs ラボ」の検証

地域をフィールドにした学習活動を推進するための「白馬 SDGs ラボ」の検証のために、参加者へのアンケート調査（全数調査）やインタビュー調査（標本調査）を行う。

### (ウ) コンソーシアム体制の検証

地域と連携した授業を推進するためのコンソーシアムについて、生徒を対象にしたアンケートを実施し、コンソーシアム体制が有効に働いたかを検証する。

**(エ) 研究成果の報告、普及、促進に向けた取組**

白馬フォーラム（地元地域対象の発表会）や観高サミット、全国サミットに参加し、成果発表を行う。また、県内の地域連携教育の先行的な取り組みを行っている学校と情報交換を行い、SSH、SGH 指定校との交流等を通じて情報の収集を図り、自校の研究を深める。

**(8) 管理機関又はコンソーシアムによる主体的な取組・支援**

**(ア) 運営支援体制**

所管の教育委員会事務局による運営指導委員会の支援体制を構築し、指導や助言を得ながら、カリキュラムやアセスメントの開発を行う。

**(イ) 授業への支援体制**

地域との協働活動として講師派遣を依頼し、協働事業を実施する。

**(ウ) 新しい学び方の研修**

国際バカロレア、イェナプラン教育、PBL など新しい学びについて、有識者から研修を受け、授業の中に落とし込むことによって、生徒の学びのスタイルを改善していく。

**(9) 事業終了後の継続的な取組の実施に向けた計画**

- ・ 地域協働学習実施支援員を継続して配置し、本事業の骨格が維持できるよう予算措置をとる。
- ・ 県内高校生全体の発信力の充実を図るため、プレゼンテーション及びディスカッション、ディベートに係るコンクールを創設し、併せて自校での学習活動を発展させる。
- ・ 全県高等学校の学習指導担当者会議を招集し、自校の研究開発の軌跡や「探究的な学び」の成果等について、広く普及する報告会を県教育委員会主催で開催する。

2019年度 地域との協働による高等学校教育改革推進事業 研究開発の概要

指定期間	ふりがな	ながのけんはくばこうとうがっこう				②所在都道府県	長野県
2019～2021	①学校名	長野県白馬高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	各学年，普通科 1 クラス，国際観光科 1 クラス，全校 6 クラスの小規模校	
	普通科	34	28	36			
国際観光科	40	39	33				
⑥研究開発構想名	「世界水準の山岳リゾート HAKUBA」の学びの循環サイクルの構築						
⑦研究開発の概要	① PBL の実践を通じたカリキュラム，アセスメントの開発 ② 地域をフィールドにした学習活動を推進するための「白馬 SDGs ラボ」の設置 ③ 地域と連携した授業を推進するためのコンソーシアムの設置						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	(1) 目的・目標 地域と協働した学びにより，白馬で成長した生徒たちがこの地域を支え，あるいは世界を舞台に活躍し，その姿を見た人々がまた白馬に集う。そのような好循環を永続的に生み出せる学校にすることを研究目的とする。					
		(2) 現状の分析と研究開発の仮説 (ア) 学校の現状と課題 大自然に囲まれた国際色豊かな白馬というフィールドを活かし，普通科では，フィールドワークや野外自然体験学習を行っている。国際観光科では，英語授業の中で地元在住の外国人との交流をしたり，高校生が宿泊施設の宿泊プランの企画から運営までを行う「高校生ホテル実習」等の取組を行っている。 国際観光科は平成 28 年度に開設され，全国募集を行っている。全校生徒のうち県外からの生徒は 20.9%，県内他地区からの生徒は 16.1%である。また，県外生徒や県内他地区からの生徒は，寮や下宿で生活をしている。そのため，地域校でありながら，多様な地域の出身者が在籍している。 課題は，高校卒業後，引き続き白馬で生活をしたいという生徒が少ない状況である。今年度 3 年生の卒業後の進路として，白馬・小谷地域に就職する生徒は，わずか 3 人 (4.0%) である。					

(イ) 地域の現状と課題

白馬村は，人口約 9,000 人規模の日本有数のリゾート地であり，この 10 年で外国人旅行者は急増した。昨シーズンのスキー場への来場者は 35 万人を超え，外国人の移住も多く，人口に占める外国人の割合は 6.2%であり，長野県内では最も高い比率である。

一方で，民宿やペンションオーナーの高齢化と事業継承が課題となっている。民宿やペンションは個人経営や家族経営が多く，労働環境も厳しい。跡継ぎになる子どもの多くは大学進学を機に都市部へ流出し，そのまま就職している。

(3) 課題を解決するための主な仮説

(ア) カリキュラムの構築

既存のカリキュラムを体系化し，地域課題を解決するための PBL を実施することで生徒の学習活動に対する当事者意識と課題解決の力が高まる。

(イ) 「白馬 SDGs ラボ」

生徒と地域の人々が協働活動できる場「白馬 SDGs ラボ」を設置することで，地域全体で社会問題についての関心が高まり，地域の未来について考えることができる。

	<p><b>(ウ) 地域への関心と愛着</b>  地域をフィールドにした PBL を通して、地域について学び、地域の人と関わることで、白馬・小谷地域に対する郷土への関心と愛着が高まる。</p> <p><b>(1) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画</b>  各学年でステージを設け、段階的にステップアップしていく仕組みを構築する。それぞれのステージで仲間と協働しながらも、生徒一人ひとりが自ら責任ある当事者としての意識を高めながら、資料を読み解く力や情報を分析する力を身に付け、地域的課題をテーマにした PBL に取り組む。教科学習においては、地域を題材にしつつ、学びが社会とつながるよう配慮する。</p> <p><b>仮説 1 学際的な教科横断型の学びと PBL が両立したカリキュラムを開発し、生徒が主体的に学びたい環境の整備を行うことで、探究的な学びが深まる。</b></p> <p>a 1年次 (2019 年度)  国際観光科 2年「観光Ⅱ」を中心に教科横断型 PBL の授業  (観光Ⅱ, 観光コミュニケーション英語, 家庭総合, 総合的な探究の時間)</p> <p>b 2年次 (2020 年度)  パフォーマンス評価, ルーブリック評価に関する研究と各授業での実験 (総合的な探究の時間, 観光Ⅰ, 観光コミュニケーション英語, 観光Ⅱ, グローバル観光)</p> <p>c 3年次 (2021 年度)  教科横断型 PBL の実施と育てたい生徒像に対応するアセスメントの完成</p> <p><b>仮説 2 生徒と地域の人々が SDGs をテーマに学び、実践活動を行う「白馬 SDGs ラボ」の設置と SDGs ワークショップの開催、及び SDGs の目標 13「気候変動を軽減させる取り組み」の実践をすることが、探究的な学びの実現につながる。</b></p> <p><b>仮説 3 地域をフィールドにした学習活動を推進するための「白馬コンソーシアム」の設置により、本プログラムに対する包括的な支援体制を組むことによつて、生徒の探究的な学びを深めることができる。</b></p> <p>a カリキュラム, アセスメント開発, 授業実践に関わるサポート  b 地域での活動における講師派遣, 協働事業の実施  c 英語教育, 国際交流のサポート, グローバル教育 (国際バカロレア, イエナプラン教育, PBL) に関する情報共有, 研修など。</p> <p><b>(2) カリキュラム・マネジメントの推進体制</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・校内実行委員会で、授業プランの企画, アセスメントの例示, 地域連携の仲介を行い、授業担当者は該当授業で育てたい生徒像と教科学習の内容を反映したアセスメントを開発し、授業を実施する。</li> <li>・授業担当者は、実施した授業についてリフレクションを行い、校内実行委員会へフィードバックを行う。</li> <li>・校内実行委員会は、授業担当者からのフィードバックをもとに修正, 改善を行い、全体の授業プランに反映させる。</li> <li>・上記の過程を繰り返し行いながら、教育課程委員会とともに、シラバスを作成し、カリキュラム化していく。</li> </ul> <p><b>(3) 必要となる教育課程の特例等</b>  特記なし</p>
<p>⑧ -2 具 体 的 内 容</p>	<p>平成 30 年度に実施した「高校生ホテル」では、英語科の「観光コミュニケーション英語」と商業・地理歴史科の「観光Ⅱ」の授業を連携させ、教科横断的な学びを行い、教科融合型の PBL の試験的な導入を行った。効果として、授業で学んだことを生徒が「高校生ホテル」のお客さんへのサービスという形で提供でき、その場でお客さんの様々な反応を見ることで、自分の学びと実社会とのつながりを体験できた。</p>
<p>⑨ そ の 他 特 記 事 項</p>	